

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 第7回メディア委員会議事録

1 開催日時 平成29年7月11日（火）13時30分～15時30分

2 開催場所 虎ノ門オフィス9階 TOKYO

3 出席者

メディア委員（五十音順）

日枝委員長、石川副委員長、安藤委員、池田委員、石井委員、Azhari委員、川嶋委員、狐崎委員、草野委員、五井委員、小杉委員、小牧委員、今野委員、齋藤委員、佐藤委員、佐野委員、白川委員、関根委員、東実委員、中屋委員、夏野委員、樋口委員、檜原委員、福地委員、藤丸委員、前川委員、丸山委員、山田委員、長井氏（村岡委員代理）、藍川氏（本橋委員代理）

臨時委員

多田氏（内閣官房オリパラ事務局企画・推進統括官）、越氏（東京都オリンピック・パラリンピック準備局契約調整担当部長）

組織委員会事務局

森会長、武藤事務総長、坂上副事務総長、中村企画財務局長、藤澤広報局長、柳館広報局次長、小野スポークスパーソン、小林企画制作部長、渡邊総合調整部長

4 議事次第

【議 題】

- (1) アクション&レガシープラン2017概要及び東京2020参画プログラムの現状について
- (2) 小・中学生からのポスター募集企画について
- (3) 第2回ワーキンググループの開催結果について
- (4) 東京2020参画プログラムの活性化について

5 配布資料（※は机上配布のみ）

資料1 メディア委員会名簿

資料2 アクション&レガシープラン2017概要及び東京2020参画プログラム

資料3 小・中学生からのポスター募集企画

資料4 第2回ワーキンググループの開催概要※

資料5 東京2020参画プログラムの活性化

6 議事録

○日枝委員長 皆様、お暑い中、多数お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまから東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の、第7回目メディア委員会を開催いたします。

まず初めに、本日の委員会は、メディアへの公開ということになっておりますので、よろしく願いいたします。

それではまず、開会に当たりまして、森会長から御挨拶をいただきたいと思います。

○森会長 委員長からもありましたように、暑い日でもありますし、しかも、いつも私は言っているんですけども、暑い時間帯に何でやるんだと、こう、もうちょっと上げるか下げるかしたらどうかなと申し上げているんですが、事務局もなかなか考えがあるようでありまして、大変申し訳ないことだと思っています。

東京のほうはこういうお天気ですが、九州のほうには大変また水害がありまして、心から皆さんにお見舞いを申し上げ、また、お亡くなりになった方に対しても御冥福を祈りたいと思います。

皆さんの御郷里が九州の方々もいらっしゃる、御心配のことだろうと思います。皆様の安全復旧作業が一日も早く進みますように、お祈りをしたいと思います。

さて、今年も半分過ぎまして、この24日はちょうど3年前になります。開会式の日も3年前になります。今後これからいかにして多くの皆さんに御関心をさらに持っていただいて、みんなで盛り上げていけるか、大事な時期を迎えてきておると思います。

メディアの皆様の中には、写真展や書道展等のアクションを実施いただきました。大会を大いに盛り上げていただいたことに対しまして、御礼を申し上げます。

今後ともメディア委員会の皆さんとともに参画プログラムを盛り上げてまいりたいと考えております。

また、盛り上げの観点から、夏祭りの機会になりました。まだ早いという意見もありましたけれども、考えたら、20年まで夏祭りは3回しかないわけでありますので、今年、

遅かったんですけども、少しそういうことで情勢の機運を図っていこうということになりまして、いろんな企画をいたしております。

大会のエンブレムをあしらいました、法被とうちわを用意いたして、もう一般販売も行っております、大変売れ行きも好調であります。全国各地の夏祭り等でお使いをいただければと思っておりますが、今日は皆様にお配りしてあるんですか。

○中村CF0 はい。

○森会長 皆様にお持ち帰りいただくように東京2020大会のPRの法被とうちわをお土産にお持ち帰りいただければと思います。

さらに、全国的な盛り上げのために、五輪音頭を今つくっております。つくっておると言いますけれども、50年前の三波春夫さんたちが歌っておられた、あれを少し今の若い皆さんにもテンポが合うように、そういう形で今準備をいたしておりますし、その浴衣も制作をしております。後ほど御紹介をしたいと思います。

この委員会のメインテーマは「復興・オールジャパン・世界への発信」であります。先日は復興をテーマにワーキンググループを開催しました。貴重な御意見ありがとうございました。

また、今年度も小・中学校からのポスター募集の企画を実施いたします。昨年度はせっかく参画してくれる子どもたちも喜んでもらえればと思っております、ここで表彰式を行いまして、日枝委員長にも御足労いただきまして、子どもたちにお祝いやお褒めの言葉をいただいたわけです。

今年は小学生の大会マスコットの投票もいたします、全国の子どもたちに学校単位で大いに議論をしていただくというので、そのマスコットの選定のプロセスを得たいというふうに思っています。子どもたちの参画という意味で、対象拡大につなげればと思います。

持続可能性の分野であります、「みんなのメダルプロジェクト」は、不要になった携帯電話や電子機器を提供いただいて、大会のメダルをつくろうという企画であります。このアクションは、どなたも参加できて、それが大会のメダルという形で直結するものでありまして、積極的に進めてまいりたいと思っております。

今日は委員の皆様には、これから参画プログラムをどのように盛り上げていこうかについて、議論をしていただきたいとお願いをする次第です。現場に精通されました、また多くの人たちからいろんな御意見をお聞きの皆様でありますので、また適切なる御指導を賜ればというふうに思います。

今日はありがとうございました。よろしくお願いいたします。

○日枝委員長 会長、ありがとうございました。

森会長からも参画プログラムについてお話がありました。また後ほどこれらについては皆様から御意見を頂戴いたしたいと思いますが、その中の一つ、皆様にもお話を申し上げたいと思いますけれども、みんなのメダルプロジェクトに参画しようということで、皆様御不要の携帯電話をお持ちになった方もおられると思います。持ってきておられる方は、今、事務局が皆様のところへ取りに伺うそうでございます。不要になったら携帯電話をオリンピックのメダルにしたいという運動でございますので、皆さんも御参加をいただければと思います。

それでは、順次お回りすることにいたします。

本日のメディア委員会では、メダルプロジェクトのような日本全国の多くの方々に大会への参画を呼びかける取組について、議論をいただきたいと思っております。後ほど皆様のメダルプロジェクトを通じての大会に参加されることへの率直な感想や御意見などがありましたら、伺いたしたいと思います。

さて、本日のメディア委員会は、アクション&レガシープラン2017の概要、東京2020参画プログラムの現状などについて、組織委員会の取組状況を事務局より説明させていただきます。また、今年2月にメディア委員の皆様にご選考いただきました小・中学生のポスター募集企画の今年度の募集につきまして、さらに、先月23日に被災地の復興に向けた取組をテーマに開催いたしました第2回ワーキンググループでの議論の内容について、御報告をいたします。それでは、先ほど会長からのお話もございましたように、今後、全国の多く子どもたち、人々を巻き込み、大会を盛り上げていくためには参画プログラムをどう活性化したらよいかなど、意見を頂戴できればと思っております。

それではまず、各社で委員の交代がございましたので、委員の変更についてお知らせ申し上げたいと思います。

お手元の資料1のメディア委員名簿に記載のとおり、5名のメディア委員が人事異動などで変更になっております。名簿記載順にお一人ずつ呼びいたしますので、呼ばれた方はその場にお立ちいただきたいと思っております。

まず、株式会社テレビ東京執行役員スポーツ局長、草野啓委員。

日本外国特派員協会会長、Khalidon Azhari委員。

株式会社テレビ朝日スポーツ局長、佐藤耕二委員。

一般社団法人共同通信社常務理事、中屋祐司委員でございます。

読売新聞東京本社専務取締役総務局長、村岡彰敏委員でございますが、本日は欠席で、長井大地様に御出席いただいております。

以上5名の方に新たに加わっていただきました。新委員の皆様には、今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。

また、所属・お役職が変更になりました方につきましては、お配りいたしました名簿に御紹介をしておりますので、お読みいただければと思います。

また、本日、臨時委員として2名の方をお迎えしております。

オリンピック・パラリンピック準備局契約調整担当部長、越秀幸委員。

内閣官房オリパラ事務局企画・推進統括官、多田健一郎委員。

それでは、ここから議事に入りたいと思います。

それでは、組織委員会事務局からの説明をお願いしたいと思いますが、今回の委員会では全ての議題につきまして、まず事務局から御説明をしていただき、その後、委員の皆様から御意見を頂戴できればと思っております。

では、アクション&レガシープラン2017及び参画プログラムの現状について。続いて、小・中学生からのポスター募集企画及び第2回ワーキンググループの開催結果について。最後に、今後の参画プログラムの活性化について、事務局から御説明を願います。

中村さん、お願いします。

○中村CFO ありがとうございます。まず、資料2を御覧いただけますでしょうか。

アクション&レガシープラン2017と東京2020参画プログラムの現状についての御説明でございます。皆様からの意見を伺いたいと思っておりますので、説明のほうは簡潔にしたいと思っております。

まず、資料2ページ目でございますけれども、アクション&レガシープラン2017でございます。本文のほうは、これは2016のときに、皆様方にいろいろアイデアをいただきまして、「復興・オールジャパン・世界への発信」ということでおまとめいただきました。基本的にはこれを踏襲いたしまして、あとはこの10カ月ほど参画プログラムということで、この復興・オールジャパン・世界への発信をテーマに、さまざまなイベントが全国で行われましたので、そのエッセンスをこのプランに入れるということとさせていただきたいと思っております。

3ページ目でございます。これは2点目でございます、ちょっと先の話でございます。

ようやく別の委員会の文化・教育委員会で検討を開始したところでございますが、東京2020フェスティバルというものを今後検討していきたいと思っております。会期がちょうどオリンピック・パラリンピック大会の直前から大会にかけてでございます。大体2020年4月ごろと申しますと、聖火リレーがスタートするという時期でございます、この辺りからオリンピック・パラリンピックの開会に向けまして、文化オリンピアードの集大成といたしまして、全国さまざまところで文化イベントを行う、それを組織委員会としても下支えをしていくというものでございます。

4ページ目でございますけれども、基本的には、下から申し上げますと、先ほど聖火リレーと申しましたけれども、聖火リレーにあわせまして、全国各地でその土地の伝統文化やクールジャパン的なイベントが行われるかと思っておりますので、それをサポートしてまいりたいと思っております。

また、東京都や国なども2020年を文化PRの好機と捉えまして、さまざまなイベントを開始するというので、こういうものも、物によっては組織委員会も共催という形で関与していきたいと思っております。

加えまして、文化・教育委員会等のリクエストもございまして、多くはございませんけれども、幾つかは組織委員会もプログラムをやっていく必要があるのではないかというふうに考えているところでございます。

5ページ目、具体的なものでございますけれども、東京都や政府と連携いたしまして、ロンドンの場合にも幾つか直前、ロンドン市で大きなプログラムがございましたので、そういったことができないかという話であるとか、あるいは聖火リレー、大会イベントと連携したプログラム、あとはオリンピックとパラリンピックのちょうど転換期などにいろんなイベントができないかというふうに考えております。

また、政府は日本文化全体の活性化、東京都は東京都の多様な文化芸術を国内外にPRするというようなプログラムを検討していかれるというふうに考えておりまして、こういったものと一緒に頑張っていきたいと思っております。

また、オールジャパンということでございますので、競技会場がある関係自治体やその他の地方自治体、そのほか、博物館、美術館といったところが、それぞれ2020年、2020フェスティバルということで、参加していただくよう仲間集めに努めてまいりたいと思っております。

2020フェスティバルにつきましては、また今後、検討が進んだ状態で御紹介をしたいと

思っております。

6ページ目が冒頭、森会長からの挨拶にもございましたとおり、今年の夏で、もう後2020年まで夏は3回というふうになっておりますので、東京都、国や関連自治体やスポンサー企業などを含めまして、全国で大会に向けた機運を醸成していきたいと思っております。

本日お配りをいたしております、法被やうちわ、加えまして3年前イベント、7月24日でございますけれども、組織委員会も理事会を開催します。東京都あるいは千葉県、埼玉県、福島県などでも3年前イベントを行いますので、これで横の連携ということで、そこでも法被やうちわを使っていたり、夏祭りでも「3 Years to Go!」という、後ほど紹介いたしますが、特別なマークを用意しまして、盛り上げていきたいと思っております。

また、この秋は1000日前イベントがございます。来年はまた平昌大会がございますので、そういった縦の連携も図ってまいりたいと思っておりますし、あとは組織委員会のSNS、ホームページなどで、いろんな方々から参加をいただいて、応援メッセージなどもいただきながら情報発信をして、盛り上げていきたいと思っております。

7ページ目でございます。こちら今申し上げました、うちわ、法被でございます。袋の中に入っておりますので、後でお持ち帰りいただければと思いますが、既に一般販売を開始しております。

また、丸川大臣にもPRをしていただいているところでございますし、また、全国の商工会議所で夏祭りに活用してくださいということで、先行販売をしております。既にうちわは14万本以上、御購入いただいているところでございます。

8ページ目でございます。こちらは先ほど申し上げました、さまざまな参画プログラムということで、特にこの7月8月9月の参画プログラムにつきましては3年前ということで、「3 Years to Go!」という文字を下につけまして、全国で盛り上げていこうと思っております。

特に夏祭りでございますけれども、9ページ目でございます。特に夏祭りということで、参画プログラムに仲間に入りたいということで、特別にガイドラインを策定いたしました。なかなかスポンサーとの関係もありまして、このマークが使いづらい面もあるという声もありまして、スポンサーの御了解をいただいた上で、条件を一定程度、緩和をしております。

一つは、祭りにはさまざまな企業が参画いたします。中にはスポンサー以外の企業も

後援等ございますけれども、その場合でも、例えばマークがついているポスターには名前を載っけないでいただきたいと。一方で、マークがつかないようなポスターではそういった企業の名前も載っけていただいて結構ですというように、一部ルールを緩めております。また、いろいろ出店、露店などの飲食店で例えば飲み物であるとか、食べ物であるとか、パートナー以外の商品が露出することもございますけれども、そこは祭りということで、大目に見ていただきたいというようなことをガイドラインとして策定いたしまして、現在、商工会等を通じて御紹介をしているところでございます。

既に、10ページにありますとおり、東京の品川区、練馬区、江東区などのお祭りで、参画プログラムと、応援プログラムということで、夏祭りを開催していただいているところでございます。

11ページ目が、現状でございます。昨年の10月からでございますけれども、一応順調に推移しておりまして、教育プログラムと合わせますと、全国で大体、今のところ約1万件の参画をいただいております。参加人数、延べ人数でございますけれども、約280万人ということで、一つ一つのイベントはそれほど大きいものではございませんが、かなり多くの方々に御参画をいただいております。

ただ、一方で地域のばらつきがまだございまして、東京及び会場がある自治体、関東近県がやはり多くございまして、そのほかの地域、日本全国に盛り上げていくということが今後の課題だと思っております。

主なものを幾つか簡単に御紹介させていただきます。12ページ目が、ただいま御協力いただきました、みんなのメダルプロジェクトでございます。これは現在ドコモショップと全国の参画自治体で、タグを組んでやっております。

ドコモショップは全国2,400店舗で行っていただいておりますし、このプロジェクトに参画していただいている全国の自治体も、4月スタートした当時は539でございましたけれども、903まで増加しております。これは1,300の自治体の約7割でございますので、広がりはかなり見せてきております。

今後、多くの携帯電話、さらにはほかの小型家電を集めていきたいというふうに考えております。東京都でも回収ボックスを設置していただいて、御協力をいただいているところでございますし、ほかの自治体、スポンサーなども御協力はいただいております。

もう一つが、マスコットのデザインでございます。13ページでございます。こちらは、本委員会の委員でございます夏野委員にも御参加いただいておりますけれども、最後、こ

の8月にデザインを募集いたしますが、そこでマスコットの審査委員をメインに絞込みを行ってまいりましてでございますけれども、このエンブレムが決まったときと同じく、最終的に三つないし四つを選ぼうと思っております、その選んだ結果につきまして、全国の小学校、これは任意の参加をこれから促すわけでございますけれども、クラスごとに投票を行っていただいて、最も得票の多いデザインとして、マスコットを最終決定したいと。オリとパラということ考えております。

こちらは参画いただくということに加えまして、全国の小学生が大会に向けて一つのものを決めてもらうと。さらに、単にマスコットがかわいいとか格好いいとかということだけではなくて、その直前、各クラスの先生方からオリンピック・パラリンピックの理念について御説明をいただきまして、クラスの中でいろいろ議論をしていただいた上で決めていただくというような、その議論をして決めるというプロセスの一つにクラスの中でなればというふうに思っております。

そのほか14ページ15ページは、この委員会でも関係いたします、復興であるとか、オールジャパンへの取組を御紹介させていただいております。

また、恐縮でございます。資料3でございます。これは昨年度も御協力いただきました、ポスター募集企画でございます。これは2020年まで続けようと思っておりますので、今年の夏休みの宿題ということで、開始したいと思っております。

資料の2ページ目でございますけれども、この7月から10月にかけて、いまいちど「2020オリンピック・パラリンピックに抱く私の夢」ということで、今回は、2020大会総合とパラリンピックの2部門を設けようと考えております。

募集対象といたしましては、全国の小・中学生、特別支援小学部、中学部及び海外の日本人学校を対象にしております。メインは、毎年でございますけれども、小学校5年生、中学校2年生を基本にしたいというふうに思っております。

ここで、参画いただいた学校などには、先ほど申し上げたマスコットの投票にも協力をお願いしたいというふうに思っております。

3ページ目でございますが、表彰におきましては、また全国から送られてきた作品につきまして、我々のほうで荒選りをいたしまして、最終的にはまたメディア委員会の皆様の投票で、金・銀・銅を決定し、表彰者はこの春休みにまたこの虎ノ門ヒルズに来ていただきまして、それを表彰するような場を設けたいと思っておりますし、その作品につきましては、さまざまな場で活用をしていきたいというふうに考えております。

私からは以上でございます。

○日枝委員長 ありがとうございます。

それでは、引き続きまして、第2回ワーキンググループの開催概要につきまして、事務局からお願いをいたします。

○小林部長 ありがとうございます。続きまして、メディア委員会第2回ワーキンググループの報告をさせていただきます。

ワーキンググループは、この本委員会で十分議論し尽くせない部分をより深めるという趣旨で、少人数でディスカッションを行うという位置づけで行うことになっておりまして、その2回目が行われました。

めくっていただきまして、1ページ目、まず今回のテーマですけれども、被災地復興に向けた取組等についてというテーマで議論させていただきました。

出席者は、今回は約20名ということで。この資料4の一番最後に今回の参加者の名簿がございますので、こちらを見ていただければと思いますけれども。今回メディア委員会から10名。この委員会のワーキンググループの性質上、メディア委員の方以外で、もしこのテーマにふさわしい方がいらっしゃれば、そういった方に御参加をお願いするというのもありますので、メディア委員以外の方が御参加いただいているケースもございます。

そのメディア委員会に加えまして、今回は復興庁様、あと東京オリンピック・パラリンピック準備局様、そして、組織委員会の関連部署の担当が集まりまして、約20名で議論をさせていただきました。

資料に戻りまして2ページ目、概要についての御説明をいたします。

まず、東京2020組織委員会のほうから、組織委員会としての取組について御説明をいたしました。

まず一つ目のポチですけれども、オリンピック・パラリンピックそのものを復興のために活用していく、そして大会を世界からの支援に対する返礼の場として捉えるという、大きなコンセプトのもとに捉えておりまして、2010年7月に被災地復興支援連絡協議会を立ち上げて、大会と関連した復興のためのプログラムについて検討を進めております。

御存知のように、リオ大会でも、フラッグハンドオーバーセレモニー、ジャパンハウス等で、復興というテーマでの演出をしてまいりました。あと、宮城スタジアムや福島あづま球場など、被災地での開催というのも決定しております。

二つ目、被災地復興支援映像について、東京都のほうから報告がありました。東京都が

復興に向かって進む被災地の姿を多くの方々に知っていただくという目的で、「2020年。東京と東北で会いましょう」という映像をつくっておきまして、それを上映しました。

3ページに行きます。復興庁様のほうから、東日本大震災の復興状況についての御報告がございました。まず被災県における復興の状況をかいつまんで御報告いたしますけれども、二つ目のポチですが、現在、避難者が約10万人、仮設住宅の入居者が3万4,000戸ということで、現在でもこれだけの方が避難生活を過ごしていらっしゃるという報告がございました。

一方、福島では、帰還困難区域を除いて、避難解除の指示がどんどん進んでおるところでございましてけれども、今後、法整備をすることによって、その事業をさらに進めていっていますという御報告がございました。

復興五輪に絡めましては、復興庁のホームページを御覧になるとわかると思うんですけども、ホームページの中に大会に関する情報を集約して、発信をさせていただいております。

以上、報告の後、具体的な意見交換がございました。

4ページ目でございます。まず、タイミングに関する議論ですけれども、あと3年ということで、現在、アクションの種をもう具体的に撒いていく時期に入っているという認識が提示されました。

被災地のニーズということに関しましては、やはり実際に、被災地の方々がどんなことを求めているのか、それを踏まえた上で、プログラムをつくるべきであるという議論がございました。

四つ目ですけれども、被災した人々の中には、今度は自分たちとして何かをしようという思いがある人がいらっしゃるということで、支援をするという視点のみならず、実際に被災地の方々がどんなことをして貢献をしていくか、そういった視点でもプログラムをつくっていく必要があるという議論がございました。

5ページ目に移りたいと思います。取組の具体的なアイデアとして、幾つか御紹介したいと思います。

二つ目のポチですけれども、例えば、海外から来た人たちが被災地に足を運んでいただくようなことをするために、組織委員会として海外向けのプレスに被災地のプレスツアーを企画して、海外のメディアにもその姿を紹介していただければどうか。

四つ目ですけれども、どうしても復興のテーマは固くなりがちですので、例えば来年マ

スコットが発表されますけれども、マスコットができた後には、被災地のゆるキャラとオリンピック・パラリンピックのマスコットを活用して、もう少し親しみやすいプログラムをつくっていったらどうかという議論です。

あと、一番下から二つ目ですけれども、ホストタウン事業というのを現在、進行していますけれども、ホストタウン事業でどんなことをやったらいいかということを経験共有するために、スポーツを通じた街づくりの成功事例、先行事例を積極的に共有して、全国各地の自治体がそれを参考できる、そういった仕組みがつかれないかというような議論がございました。

6ページ目、今後の取組についてですけれども。まず一つ目は、やはり被災地のニーズに寄り添うということで、これはメディア委員の方々にも今後、御協力をいただく可能性もありますけれども、地域の人たちと組織委員会と一緒にオリンピック・パラリンピックを、どうやって活用していくかということを考えるワークショップを実施してはどうかという意見がございました。

あとは、参画プログラムを積極的に活用するという事で、被災地で行われている取組を積極的に認証していったら盛り上げていく。

そして、三つ目が世界への発信ということで、被災地から日本全国あるいは世界に対して情報を発信する機会やコンテンツを提供していく機会をつくってどうか、このようなアイデアがございました。

第2回のワーキンググループの開催の概要の御報告は以上でございます。

○日枝委員長 御説明ありがとうございました。

また、委員の皆様、ワーキンググループでは活発な意見交換が展開されたとお聞きしております。御協力に感謝いたします。

補足などがございましたら、後ほど御意見を頂戴したいと思います。

では、引き続き、本日のメイン議題でございます、参画プログラムの活性化について、事務局から説明をお願いいたします。

○中村CFO ありがとうございます。資料5、枚数の少ない資料でございますけれども、参画は、参画プログラムのためだけということではありませんで、2020大会の非常に大きなメッセージの一つだと思っております。大会に参加するアスリート、あるいはスタジアムに来る観客以外にもボランティアもそうですし、さまざまな形で、できるだけ多くの方にこの2020大会に何らかの形で参画をしていただきたいと思いますということで、さまざまな取組をこ

れまでもしてまいりました。

例えば、自己ベスト、多様性と調和、未来への継承という大会ビジョン、これをつくる際にも多くの方々の御意見をいただいたり、あとは大会のエンブレムですね。いろいろございましたが、今のエンブレムに決まる際には、公募をしまして、非常にオープンなプロセスで、候補作品を事前にオープンにしまして、御意見をいただいて最終的に投票で決めたということなども既にやっております。

また、先ほどの携帯電話のメダルプロジェクト、あるいはマスコットの小学校のクラス参加なども、これは単に参画プログラムに参画するだけではありませんで、携帯電話なども使い古した携帯電話をリサイクルに回すという行為自体も、非常に持続可能性の観点からは望ましいところがございますが、単にそれをプッシュするだけではなくて、それを実際の大会のメダルにつくっていくということで、一つ一つの行為が大会そのものに結びつくプロジェクトだと思っております、我々も後押しをしていきたいと思っております。

また、マスコットのほうも先ほど申し上げましたように、単に参画していただくということではありませんで、まさにマスコットを決めてもらうということ在全国の小学校にお願いするということで、小学校の子どもたちの一人ひとりが、より2020大会にコミットしたという意識を持ってもらえるということを考えております。

したがって、今後も参画プログラムにつきましては、単に全国で大きなイベントが開かれたと、多くのイベント、多くの人数に参加していただいたというだけではなくて、なるべくこの大会に何らかの形でタッチしたというような企画を今後とも考えていきたいと思っております。

これから御紹介するのは、単に今まで出てきた意見であるとか、あるいは事務局のほうでこういうものを考えられないかといったものを幾つか御紹介いたしますが、ぜひ、メディアの方々も、もっとこういうことができるのではないかといった御意見、今日、賜れば非常にありがたいと思っております。

例えばでございますが、1ページにありますとおり、全国の御当地のPRの映像を大々的に募集することもあるのではないかと考えております。その画像や、映像などを、例えば大会で競技の合間に映すとか、あるいは競技場に入っていただくところで見いただくかといったことが考えられます。

リオでジャパンハウスがございましたけれども、そのときも全国の自治体の協力をいただきまして、大きな目のスペースをつくりまして、そこに全都道府県の名所のパネルを設置

しまして、かつ、パンフレットですね、英語とポルトガル語のパンフレットを置かせていただきました。殊のほか非常に人気を博しまして、パンフレットなどはすぐになくなってしまいました。

ということで、海外の方も東京だけではなくて、日本全国いろんなところに、いろんな名所があるということを非常に興味を持っていると思われまので、こういった画像、映像などを全国から募集して、大会時に活用できればというアイデアがあるのではないかと考えております。

また、これは今後の検討でございますけれども、各県、各市にいろんな名産品があろうかと思っております。既に、こういったものを使えないかといった申し出もございましてけれども、こういったものも積極的に我々としても会場や、あるいは選手村などで活用ができないかということを検討できないかと思っております。

もし、こういうことができれば、それこそ全国の自治体が地元産品を活用するという形で、大会に参画するというようなことにもつながるわけでございます。

また、先ほど募集いたしましたポスターも、非常に多くの、数万人の小・中学生に既に参画いただいております。毎年毎年、非常に感謝をしておりますが、それも1年1年の企画で終わらすのではなくて、例えばでございますけれども、選手村の選手の部屋に飾るとか、あるいは2019年最後のときには、自分の応援する国、自分の応援する競技などをテーマにして、例えば国ですと、その国を書いたポスターをその国の選手の部屋に飾るとか、そういった活用方法も一つのアイデアですが、考えられるのではないかと考えております。

また、この委員会で出ました子供レポーターも、ぜひ単にアイデアだけではなくて、実際に実現できればと思っております。特に、被災地もございましてけれども、子どもたちが2020大会に来ていただきまして、会場内の様子や、あるいはボランティアがどんな活動をしているかということ子どもたちの目から取材していただきまして、それを組織委員会のホームページなどを通じて発信し、またメディアの方々にもそれを報じていただくとか、ということも考えられるかと思っております。

また、復興支援がこの委員会のテーマでございますので、例えば被災地の競技会場、福島・宮城がございましてけれども、また、今度決まりました鹿島もございまして、その競技場の一角で例えば一つの壁を御提供いただきまして、子どもたちの感謝の絵とか、感謝の文字とか書いていただく、あるいは伝統芸能などを発信するような、そういったことも参画プログラムの一環でできないかといったことも考えております。

以上が、幾つかこのメディア委員会に関係するテーマで考えたテーマでございますけれども、ほかの委員会でも幾つかございます。簡単に御紹介いたしますと、2ページ目でございますが、例えばアスリート委員会などでは、運動会を活用しまして、毎年、秋、最近春もございませうけれども、小学校、中学校で開かれる運動会でパラスポーツをどれかやっていたりとか、あるいは東京2020大会新種目をやりましたので、それを取り入れた運動会をやっていたりとか、あるいは地域の学校は、だんだんと小規模化しておりますけれども、合同運動会をしていただく、あるいは特別支援学校と一緒に共同の運動会をやっていたりしまして、地域のオリパラ運動会・応援合戦というようなものもアイデアとして出ております。

また、長野では、一国一校運動というのがございましたけれども、これだけ子どもたちも含めてインターネットを活用しておりますので、より細分化いたしまして、1人1アスリート運動というようなものがないかと考えております。子どもたちが応援メッセージを寄せ書きしていただいて、それを選手村で寄贈するであるとか、また選手からの感謝の言葉を子どもたちにフィードバックするとか考えられます。

また、アスリートの関係では、金・銀・銅だけではなくて自己ベスト、これは大会ビジョンの一番目でございますけれども、自己ベストを記録したアスリートには、それを会場内でアナウンスいたしまして、会場全体でそれを祝福するとか、その結果を競技場のボードに送るとか、あるいはアスリートだけではなくて、あらゆる人の自己ベストを募集するというような企画なども考えております。

この委員会の関するテーマだけではなくて、今、申し上げたように、いろんな企画、御意見等々いただければ、ありがたく思います。

以上でございます。

○日枝委員長 ありがとうございます。

それでは、ここから皆様方の御意見などを頂戴いたしたいと思っております。

今、事務局から復興に向けた取組や今年度の小・中学生のポスターの募集企画について、あるいは参画プログラムの活性化に向けたアクションのアイデアなど、いろいろな報告がございましたが、どの項目でも結構でございますので、今の説明についてアイデアがございましたら、お話しいただければ幸いです。

どうぞ。

○佐野委員 産経新聞の佐野でございます。

私、ワーキンググループにも出ておりまして、そこでも発言したんですが、今、割と釜石にちょっと関心を持っておりまして、ちょこちょこ顔を出したりしておるんです。ちょうど、いろいろ話をしておりますと、7回忌を今年迎えたということで、やっと前向きになれたというふうなことをいろんな形で話を伺っております。

その中で、今、釜石で中学生とか高校生とかが英語の勉強をして、英語のボランティアをやろうとか、いろんな動きが出ています。それから、トラベルマップをつくって、ちょっと近くの山を散策するようなマップをつくって、それを英語とかフランス語とかに訳してというふうな地図づくりも行われました。

皆さん、今、自分たちで何かをしようという意見が物すごく強いんです。被災地に対して、やはり我々が何ができるかということよりも、被災地の皆さんが今、何をしたいのか、そして、どのようなことを求めているのかというニーズを組織委員会として把握していただくというのが、いわゆる復興支援という形から言えば、一番望ましい形になるのではないかなという気がしています。

被災地の皆さんが、こういうことをやりたいということと、我々が東京にいて、こんなことをやったらどうだということとで、やはり温度差があると思うんです。その温度差を埋めるのは、やはり被災地に入ってその意見を聞いて、これは東北だけではなくて、今、九州は大変なことになっています。それから、熊本の地震もまだまだ復興というところまではいっていないと思うんですね。

それらのところに寄り添うような形のものをつくっていけないだろうかということで、人的には大変かとは思いますが、ニーズをまず聞く。それから、そこで何ができるのかということ在地元の人たちと一緒に考えていく。そんなような仕組みを、やはりつくるべきだろうというふうに思っています。

○日枝委員長 ありがとうございます。ほかに、どうぞ、御遠慮なく。事務局からは、後で皆さんの御意見についてお話をしたいと思います。

藤丸さん、どうぞお願いいたします。

○藤丸委員 TBSの藤丸です。

私、ワーキンググループとはちょっと違うんですけれども、スポーツと健康というところの1人1アスリート運動というところで、私が選手だったときにも、選手村ではがきのようなものが届きまして、個人レベルで、シンクロの選手が大好きです。頑張ってくださいとか、そういうのが手元に届いたんですね、選手村で。それがすごくうれしくて、すごく

力になったので。

学校単位でももちろんいいんですけども、個人でそういうのをポスティングしたときに、選手にこれからそのまま届きますよというシステムがあれば、すごく国民の皆さんも、自分たちが書いたのが届くんだという思いですと、参画したような気持ちになるんじゃないかなと思いました。

○日枝委員長 ありがとうございます。

どうぞ。

○佐野委員 今のことに関連してなんですけれども、長野のときもそうだったんですけども、ポスターをいわゆるはがき、絵はがきみたいにして、それでいろんなところに配ったりしました。これは、当然、選手にも配りましたし、それから報道陣にも配られました。

あるいはもっと前から、例えば、今、今年選ばれた人たちのものをはがきにして、いろんなところに配って、平昌のオリンピックに参加する選手たちを激励しようとか、あるいは、これからいらっしゃる海外のメディアの方にお配りするとか、何かそんなような形で、割とポスターだと大きくなり過ぎてしまうので、手軽にできるという。今、藤丸さんおっしゃったようなはがきだと思うんですね。そういうようなものを何か考えられないだろうかかなと思います。

○日枝委員長 ありがとうございます。

例えば、話のきっかけとして、携帯電話のメダルプロジェクトをこれから進めていくわけですけども、全国的にこれがうまく展開できるような何か皆様、アイデアがあったらいただきたいと思います。

事務局、ちょっとその前にね、携帯電話はメダルをつくるのに何個ぐらいいるんですかね、おおよそ。

○中村CF0 それぞれ携帯電話はいろいろございますけれども、やっぱり数百万台は必要だということでございます。

ただ、これから3年間で、NTTと自治体の御協力をいただければ達成できるんじゃないかというふうに考えておりますけれども、やはりまだ自治体で広がりが出ていないところもございまして、そういったところなどはどうやって盛り上げていいか、いろいろメディアの方々のアドバイスをいただけると非常にありがたく思います。

○日枝委員長 こんな心配する必要ないと思うんですけども、オリンピックが終わった、それで、その集めた金はどうするんですかね。

○中村CFO 基本的にはメダルになりますけれども、メダルの必要量が確保できた時点で、一応そこはストップをいたしますけれども、むしろレガシーとしてそういう携帯電話とか、使い終わった家電がリサイクルに皆さんが行くような、そういう流れができればいいなというふうに考えております。

○日枝委員長 僕は今、きっかけにお話ししたわけですね。

どうぞ。

○夏野委員 2点ありまして、1点目は、参画プログラムの活性化の中に、これからポスター企画とか、子供レポーターとかいろいろ出ているんですけど、例えばポスター企画というのがこの話として出ていて、一方で、こっちの小・中学生からのポスター募集企画は、今年またやるんですよね。

ぜひ、何か連動してほしいなというふうに思っていて。金・銀・銅もいいんですけど、例えば先ほどお話があった選手村の部屋に飾られるということが、もう確定しているコンテストだと、やっぱり小・中学生もやる気になると思うし、それから、日本語を書かないと思うんですよ。

「3 Years to Go!」なんで、先が見えてきたんで、これからやるこういうポスター募集企画は、何か用途を明確に、何部屋あると決まっているんだったら、今年は100点に選ばれますと。選ばれたのは、どこかの選手の部屋に飾られますという、何か選ばれたほうもうれしいしという部分で、用途を明確にするアプローチをもうしてもらっていいんじゃないかなと。

ですから、はがきも募集するときに、こういう用途で使います、何点選ばれますと言ってもらったほうが、応募するほうも選ばれたらそう使われるんだなとわかるんで、何かうれしいなと。

それから、もう1点は全く別の点なんですけど、やっぱり、何か見返りが欲しいんですよ。ということで、ぜひ提案でピンバッジとかはお金がかかるので、シールをたくさんつくっていただいて、例えば携帯電話を寄附した人にはこのシールをあげるという、小さいシールで結構なんですけど。ポスターに応募した人はこのシールをもらえるとかいうんで。夏祭りに参加するとかこのシールをもらえると、ちょっとずつ全部違えておいて、全部コンプリートした人は何かヤフオクに出して物すごい価値があるとか。1個ずつは1円とか2円の価値しかないんだけど、何かいろんなものに参画するとちょっとずつシールがもらえる、別にいらぬ人は捨てればいいのか、というぐらいの何か見返りをあげるという

のを、コストをかけないで、ぜひ検討していただきたいなというふうに思います。

○日枝委員長 大変おもしろいアイデアだと思いますので、ちょっと検討してください。

ほかにどうぞ、今のような御意見があったら、ぜひ。

さっき、森会長もおっしゃったように、あと3年しかありませんから、今からやってちょうどいいぐらいなので、よろしくをお願いします。

池田さんもプロジェクトにお入りになっていたと思います。何かございますか。

○池田委員 東京写協の池田といいます。

ワーキンググループにも出まして、いわばセカンドエンブレムの話の使いづらさについて、ちょっとお話し申し上げたところ、いろいろ改良していただいて、そんなにハードルが高くないように思えたのは非常にいいと思います。

実は、私の知り合いで、何とかセカンドエンブレムを使って何かやりたいんだという人間がいて、さまざま障壁があったり、スポンサーとの問題があって、大変だぞという話は正直なところ言ったんですね。

今日、配られた資料の中にも、いろんな使い方のサジェスションもあるので、ロンドン大会でセカンドエンブレムを使ったのは、たしか読売の結城さんがいろいろ指摘されておりましたけれど、それと同じように、エンブレムを使って何かしらが楽にできるという方向性をもっと明確に、申し込みも簡単に、審査もあつという間にといい感じでスピード感を持ってやっていただくと、また変わってくるんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。

○日枝委員長 どうぞ。

○中村CF0 池田委員の今の御指摘、ありがとうございます。確かに、おっしゃっていただいたように、エンブレムはなかなかいろんなルールがございまして、使い勝手が必ずしもよくないと。使って、できるだけ大会を盛り上げたいという方がいる一方で、なかなか制約があったというところはじくじたるところがありましたけれども。

先ほど申し上げたように、スポンサーの方々も大会を盛り上げていただこうというところは一緒でございまして、御理解を得て、先ほど申し上げたように、あそこのエンブレムとスポンサー以外の企業が同じポスターの中にあるとなると、なかなか難しいところがございますけれども、エンブレムがある、第二エンブレムがあるようなポスターのところには、スポンサー企業の名前だけで、もう一つそれとは関係ないポスターをつくっていただいて、そこにはいろんな後援企業の名前があるというような、ポスターを2枚つくって

ただくということであればいろんなクリアができるかと思しますので、そういったことも一つ一つ説明していきたいと思っていますし。

今、言っていただいたように、手続もこの7月の末から、今はメールでやりとりをしていたんですが、ウェブで入力すると自動的にこちらに届くような簡易なウェブのシステムを構築いたしましてスタートさせますし、運用範囲も広げてまいりたいと思っていますので。あとは、いろんな記載事項とか、できるだけ簡素化して、できるだけ参画したいという気持ちを無にしないように頑張っていきたいと思っております。

あと、佐野委員から言っていただいた、特に被災地の方々の意見をよく聞いて、一緒になってという御指摘でございますけれども、まさにベニューがございます宮城県とか福島県とか、今度、茨城県とか、ようやく5月の末に大枠合意ができて、まさに各県と組織委員会が向き合って、大会準備に向けた場がスタートいたしましたので、そういった場で大会準備の直接の準備だけではなくて、そういった盛り上げとか、機運醸成といったところも、まさに御意見を聞きながら、我々もこの前、IOCの調整委員会がございましたけれども、IOCに対してもそういった開催都市以外の開催自治体が開催都市に準じていろんなマークを使えるとか、そういったメリットがあると、きっと盛り上げると思しますので、IOC側にもそういったリクエストをしております、一つ一つやっていきたいと思っています。ありがとうございました。

あと、藤丸委員の1人1アスリートというのは、やっぱりやっていきたいと思っております、そうですね、学校だけじゃなくて、一人一人でコンピュータなどを使って、国籍を問わずですね。例えば簡単な「こんにちは」と「ありがとう」みたいなのをちゃんとそこに載っけておけば、そこをコピーして、ちょっとメッセージがつけられるですとか、そういった工夫もできると思っていますので、考えてまいりたいと思います。

あと、夏野委員のポスター連動を考えていきたいと思っておりますし、シールというのは非常に魅力的なアイデアでございますので、検討させてください。ありがとうございました。

○日枝委員長 ほかにも、ございますでしょうか。

どうぞ。

○小杉委員 日本テレビの小杉でございます。

今のエンブレムの件と、夏に向けた機運醸成ということで、これは意見ではなくて報告なんでございますが、弊社では毎年、24時間テレビというのを夏にやっております、今年も8月26、27日とやるんですけども、そこでチャリティTシャツというのをつくっている

んですが、そのデザインが野老朝雄さんをお願いいたしまして。東京2020の公式エンブレムは三つの四角を組み合わせてつくって「多様性と調和」ということなんですけども、私ども、今度、野老さんがやっていたデザインは、三角と四角だけでつくって、「個性と多様性」ということで。

かなり2020エンブレムにつながるコンセプトがありまして、事前番組でありますとか、本編の中で、当然、今回の24時間テレビのチャリTシャツをつくった、その考えはどこにあるのかというのを披露させていただきますので。そのときに必ず2020の公式エンブレムの話になるということで。機運醸成ということにちょっと努めていきたいかなと思っています。

Tシャツ持ってきましたので。これは三角と四角だけなんですけど、これ花なんです。一つ一つの形はちっちゃいけれども、それが組み合わさるといろんな花が咲くという、そういうコンセプトで。幾つかの花のデザインをつくっていただいたということで。

これは番組の中、あるいは事前番組でちょっと紹介させて、野老さんをフィーチャーしていこうと思っております。これは報告でございます。意見ではありません。

○佐野委員 産経の佐野です。すみません、たびたび。

夏祭り、大変結構だと思いますし、法被とうちわという、ある意味では日本にとって非常になじみやすいものという形で、いいかなと思います。

実は、思いますけれども、これは資料2の9ページのところで、夏祭り応援プログラム云々ということがありますがけれども、会場における飲食店の出店というところがありますね。これ、幸いなことにか組織委員会にとってはちょっと複雑かもしれませけれども、マクドナルドが撤退したということで、ある意味ではそのおもしろさが取れて、いろんなものができるのではないかとということで、日本独特の屋台というものをこれから3年間、あるいはオリンピック開催期間中、いわゆる食品小売りのものがつかなければの話ですけども。いわゆる、屋台を日本独特の文化として、祭りの屋台を発信するという、そのやり方があるのではないかと思うんですね。

その際には、当然、県産品のもの、多様化したり、あるいは被災地の野菜等とか名産品等とかを上手に使うことができないとか。そういったことを何か積極的にやっていると、海外の人々に対して祭りというものを。だからもう、基本的にオリンピックは祭りであるというふうな考え方に立てば、そういうことも可能だろうなと思います。

あと、これはちょっと質問なんですけど、ポスターを2種類用意する。その間のすき間

は何センチぐらいを想定されていますか。当然すき間はあけるだろうと思うんですけども。二つ並べてやったときに、区別はしなきゃいけないけれども、ぎりぎりのところまでというは何センチぐらいになるんですか。

○中村CF0 直接はマーケティング局なんであれなんですけれども、おっしゃるように概ね何センチという基準があるのかもしれませんが、ちょっとここまで申し上げるといいのかどうかわかりませんが、それ自体があまり、何というんでしょうね、国民の方とか都民の方から見てナンセンスにならないようにしていくのが大事じゃないかなと思っています。

趣旨は、要するに、禁止すること自体が自己目的ではありませんで、何となくそのマークとスポンサー以外の企業が混同してしまっていて、それが企業のPRになるとか、販売促進につながるというところをストップするのが目的であって、機械的に何センチか、10センチがだめで、5センチがだめだというところを、何というんでしょう、マニアックに定規ではかるというのが目的じゃありませんので。

一方で、何もないと混乱しますので、一定の基準は設ける必要があると思うんですけども、最後の判断のところは、そういった制度趣旨を乗り越える悪意があるかどうかというところが、一番大事なところじゃないかなと思っています。

○佐野委員 皆さん、やはり、その辺を非常に気にされているというところはあります。できたら、すつと行ければ一番いいという、その基準を早くつくってあげれば、参加する方も増えていくんじゃないかなと思います。

先ほど池田さんがおっしゃったように、やはり認証プログラムに関して、ハードルの高さを随分いろんなところで聞きました。今回、中村さんのお話を伺いまして、ある意味では、もう乗り越えられるところまできたなという感じはいたしました。

○日枝委員長 ありがとうございます。

ほかにございませんか。

夏野さん、携帯はお得意中の得意なんだけど、みんな同意するには何かいい手がないですかね。何かやり方。

○夏野委員 みんな、データがちゃんと消してくれるのかとか、そこが不安なんですよね。なので、実際ドコモに持っていくと、かなり慎重に個人データとかが漏れないようにきちんとやっているんで、もうちょっとそこをドコモにアピールしてもらおう。アピールしてもらおうと、ぐっとハードル下がると思います。

それからもう一つ。今、区のセンターとかに持っていくのは、パソコンとかほかの電化

製品もオーケーなんですけれども、ドコモだけは携帯しかだめとなっていて、ちょっとわかりにくいので。ちょっと間口、どこに持っていっても電化製品というか金属物が入っているようなものは、みんなオーケーというふうになるといいなと思いますね。

この二つです。

○日枝委員長 何かありますか。

○中村CF0 ありがとうございます。データ消去のほうは、夏野委員おっしゃるようにNTTドコモはショップでございますので、きちんと機械に穴をあけて、完全に消去する形でございます。

あと、今ありましたボックスのほうですと、やはり自分で消去していただくということになりますので。そこはドコモさんとお話をしまして、心配な方はドコモショップにお願いいたしますということに、徹底したいというふうに思っています。

あと、おっしゃるように、ドコモのほうは携帯電話会社ですので、基本的に携帯電話だけということになっておりますけれども、恐らく、運用でお預かりして、それをリサイクル会社に引き渡すようなことを相談で検討していきたいと思います。

ありがとうございます。

○日枝委員長 それから全国にいろんな考えがあるんでしょうけど、全国から情報を発信する、と。さっき映像つくるという話がありましたけれども、外国の方が来られて、全国にどうやって誘導するかという方法について、何かワーキンググループでは出たんでしょうか。

○小林部長 全国への発信に関しては、やはり、我々、意外と東京にいて気づかない、外国人にとっての魅力がある地域が非常にたくさんあるという話がありまして、そういう意外と日本は知らないけれども外国人のほうがネット等で先に知っているというような魅力的な場所、あるいは文化、そういったものをピックアップして、組織委員会として伝えるようなプラットフォームができないかというような御意見がございました。

こちらのほうは、ぜひ、実際にそれぞれの地域に伺って、取材をして、私たちとしても協力できないかなということを考えております。

○日枝委員長 どうぞ。

○佐野委員 今の件なんですけれども、せっかく全国に大学連携が700校以上あるので、大学に対して、地元の映像で、地元の魅力、あるいは地元の名産を発信するようなものをつくってもらって。それこそ、ポスターコンクールではないんですが、映像コンクールを

やったっていいんじゃないかなと思うんですね。その映像を流すというふうな形。

大学のその種のサークルとかというのは、結構すごいことをやっていると思いますので、それを活用するというのはいかがでしょう。

○小林部長 ありがとうございます。大学との連携プログラムというものは非常に大きな課題だと思いますので、ぜひ、検討させていただきたいと思います。

○日枝委員長 ほかに何かありませんか。

例えば、大変、陳腐なアイデアで恐縮なんですけど、さっき夏野さんからシールの話が出ましたよね。みんなシールをどういう保存をするかですよ。例えば、2020オリンピック記念というこういうのをつくって、それを買って、全部それに貼っていく子どもたちっているんだろうと思うんですね。親も。さっきの携帯を提供した時もらう。それから例えば、これは地方自治体でお金がかかることなのかもしれないけれども、全国の、まあ県でもいいんです、どこでもいいんですけど、代表する地元の絵ですね、写真ですね。それを同じようなサイズでシールにつくっておくと、海外の人も、俺ここ行った、あそこ行ったと貼っていくこともあるんじゃないかと。そんなお金かかんないんじゃないかと思えますけれども。お金のかかることは、あまりかからないと言うと怒られるので言いませんが。

オリンピックで、同じサイズで、全国のいろいろ代表するものを集めるというのを楽しむ人もいるんじゃないかと思うんで。アイデアですけれども。どうですか。

○中村CF0 ありがとうございます。ちょうどオリンピックとパラリンピックのエンブレムが45の四角形でできているんですね。ちょっと都道府県、全部回ると余っちゃうんですけど、そういうふうに各県1枚ずつぐらい四角形で、エンブレムをつくるのかいうんだとグループでやってもいいかもしれませんし。ちょっと検討させていただきます。ありがとうございます。

○日枝委員長 ほかに、ワーキンググループに御参加の、丸山さん、何かございましたらどうぞ。

○丸山委員 すみません。ワーキンググループの議論とはちょっとそれるんですけども。やはり、レガシーということになりますと、どうしてもお子さんとか教育というほうにプログラムがあると思うんですが。ちょっと拝見して、世の中、一生懸命、元気で頑張っているらしい高齢者の参画というところにも目を落としまして、まさに調和という意味で、共生社会という意味においては、やはり、頑張っているらしい高齢者の方も日々、競技

会場周辺だけでなく、何というんですかね、街づくりですとか盛り上がりというところにも、例えば町内会とか、今、各地でグラウンドゴルフですとかゲートボールとか、いろんな組織がありますけれども、そういったところに参加している運動好きの方たちを巻き込んで、そういった方たちの共通のTシャツだとかそういったものを身につけてもらって、日々の活動の中で、今後、街づくりですとか、あとは町内のゴミ拾いですとか、いろんな意味で大会に向けて、あるいは大会近辺の時期ですけれども、盛り上げに一役買ってもらうとか、そういった取組もあるのではないかと思ったりしております。

○日枝委員長 ありがとうございます。

ほかにどうでしょう。何でも結構でございますので、御提案いただければ。事務局は大変喜ぶと思いますので。

どうぞ。

○檜原委員 被災地の件とか、先ほど皆さんが言われたこともそうなんですけれども、オリンピック・パラリンピックの主役って、やっぱりアスリートだと思うんですね。アスリートがどこの出身であるかということは重要だと思っていて。例えば東北出身、あるいは熊本でもいいんですけれども、そういう主役であるアスリートからのメッセージが逆に全国に届いたり、世界に発信できたらいんじゃないかなというふうに、メディアとしても思っています。

やっぱり、自分の県出身の有名人はヒーローですから、今、活躍しているトップスリート、あるいは未来のアスリートが逆にアンバサダーとなって全国の、日本の文化を紹介したりとかいうものが逆に、被災地に向かったりするのもあると思うんですけれども、その逆発信というものが彼らを通してできて、それが競技も越えて、例えば、さっき佐野さんがおっしゃった、釜石市だったらこういう人たちがいる。ラグビー選手もいれば、サッカー選手もいるしというような、オリンピックもパラのアスリートも含めて、何かそういうプラットフォームなのが発信ができないかなというふうに感じています。

○日枝委員長 ありがとうございます。

どうぞ。

○中村CFO ありがとうございます。今のは非常に参考になりました。先ほど佐野委員からもございましたけれども、被災地を含めて、東京以外の各県にどのように盛り上げを図っていくかというのはなかなか難しい話で。どうしても我々ですと、各県のオリパラ本部とかそういうところを通じて何とかしましょうとなっちゃうんですけれども、今、言っ

ていただいたように、その県、その市出身のアスリートに御活躍いただきまして、例えば、先ほどの携帯電話のやつも、アスリートから県で、こういうのがあるからやっていたかどうかという非常に訴求力が出ると思うので、その都市その都市のドコモショップで、その都市出身の2020に出るようなアスリートの方々とタイアップしていただいて、メッセージを出すとか、いろいろ考えていきたいと思います。ありがとうございます。

○日枝委員長 どうぞ。

○藤丸委員 ちょっと今のひもづくんですけれど。例えば、地元のアスリートたちを、等身大パネルか何かわからないんですけど、ちっちゃい置物か何かわからないんですけども、駅前などに置いて、そこに行けばその選手の、例えば判ことかが押せるとか、それこそシールが1個貼れるとかとすると、もしかしたらその駅に着いたときに、ここの出身のアスリートってこんな人がいるんだなと思いながら。次この県に行ってみようかななんて思えるのかななんて、ふと思った次第ですけれども。そういうのがあったら、子どもたちはおもしろいかなと思いました。

○日枝委員長 ありがとうございます。

ほかにございませんか。

Azhariさん何か、外国から見た何かございますか。

○Azhari委員（通訳） 本日はお招きいただき、ありがとうございます。海外メディアの一人としてコメントをさせていただくと、海外メディア向けのメディアセンター等の施設を、ぜひ、私ども業界と協業できるような形で協力させていただきたいというふうに考えております。

皆様の仕事自体は大変、重要なお仕事で、東京オリンピックを成功に導くためにいろいろと御活動されていらっしゃるということは重々認識しつつ、私ども日本外国特派員協会としては、皆様と協業しながら海外に情報が確実に発信できるような体制を整えていきたいと思いますので、今後ぜひ協業させていただければと思います。

ありがとうございます。

○日枝委員長 ありがとうございます。ほかにございませんでしょうか。

○中村CFO どうもありがとうございました。

やはり、2020年は世界の方々が東京や日本をどう見るかと非常に大事ですし、我々もどう見られているか、何をPRしていくかというのは、ひとりよがりではいけないと思っていますので、ぜひ、こういうところがまだPRが足りないよとか、そういったアドバイスをぜひ

ひ、事務局にも海外広報の担当がいますので、ぜひいろいろアドバイスをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○Azhari委員（日本語訳）ありがとうございます。

私たちは、記者クラブを用意しています。新たに、記者クラブのスポーツ取材が専門のメンバーからなる2020委員会を立ち上げようとしています。また、オリンピックの報道のために日本や東京へ来る全てのメディアに対して、メディアのアクレディテーションの手続きを手伝っていきたくと思っていますし、これは、私達にとっては一番の優先事項です。オリンピックはとても重要なイベントなので、東京オリンピックの成功に貢献できれば、とても嬉しいことだと思います。特に日本の外の人たちからのどんなアドバイスもみなさんにお伝えできればと思いますし、テレビ放送においてそれはとても重要なことだと思っています。とても挑戦的な取組ですが、私達もこの点に向けて準備を進めてまいります。

○藤澤局長 広報局長の藤澤といいます。どうもありがとうございます。

東京2020の大会時に世界からたくさんのメディアの方がいらっしゃいます。全体で、プリントカメラマン等だけで2,000。それから、ブロードキャストは何万という、1万、2万という単位で来ます。それに対して我々、いかにきちんと快適な環境の中で取材していただけるかという準備を進めておりまして、これからいろいろFCCJのほうにも御相談する機会、多いと思いますので、よろしく御協力いただければ非常にありがたいと思います。

○Azhari委員（日本語訳）私たちも、みなさんをお迎えする用意があります。記者クラブに東京2020大会向けの、24時間利用可能な部屋を設置する予定があります。ゲストについては11時までですが、記者の方に対しては、多くの記者がそれを望んでいると思いますので、24時間開業します。私たちは、いつでも東京2020組織委員会を、みなさんのサービスをサポートしたいと思っています。

○藤澤局長 いろんな御助言いただきたいと思います。それから、来週、武藤事務総長のほうでFCCJで記者会見といいますか、いろいろ東京2020に向けてのいろんな取組を御紹介する予定にしておりますので、よろしくお願いいたします。

○Azhari委員（日本語訳）歓迎いたします。

○日枝委員長 ほかにございませんか。

どうぞ。

○前川委員 今のお話を伺っていて、その流れで思ったんですけども、これからの未来を担う子どもたちが、いろんな形で2020に関して関心を持ってくれたり、体験することで

その先の未来を彼らが創っていくというところにつながっていけばと思うんです。そうすると、日本に住んでいるのは別に日本の子どもたちだけとも限らないので、例えば、在邦外国人子女の協力と盛り上げみたいなことを、例えば在京の各国大使館と連携して外国語サポートみたいな形でボランティアを経験してもらったり、あるいは、子どもレポーターみたいな形で、日本人の子どもとこちらに住んでいる外国人のお子さんなどをペアにするとか、日本の今の小学生たちのインターナショナルマインドをこういう機会を通じて、日本に住んでいる色々な国のお子さんたちとも協力して一緒に何かをやっていくことで育み、リテラシーを身につけてくれたら、将来的なレガシーの1つにもつながっていくのかなと思いました。

あともう一つ、こうして組織委員会やメディア委員の皆様とお話をしていると、もう既にあと3年ない、時間がないと思うんですが、一般の人たちの感覚でいうと、まだまだそうはいつでもオリンピックってまだちょっと遠いのかな、みたいな感覚もあるので、もっと自発的な参画意識を高めるような工夫とか気づきとか、2020年への入り口をもう少し多く設けられたらと思います。

私の不勉強を恐れずに申し上げますと、例えば五輪マークをもう少し活用して一般の皆さんの中にその意識を高める、というようなこともできないのかなと。もちろん、アンブッシュ・マーケティングであるとか、IOC、JOC等の色々なレギュレーションがあると思うんですが、例えば、ロンドン五輪の時やバンクーバーの時なども五輪マークを効果的に、早く、視覚的に露出を増やすことで、みんなの中にそういう気運を醸成させるということがあったので。

例えば五輪マークを利用したホットスポットを作ってSNSで素早く拡散するようなことがレギュレーション上OKであれば早くできるといいなと思いました。

○中村CF0 前川委員ありがとうございます。前段の日本にいる外国の子どもたちとか大使館との連携というのは、非常にいいアイデアだと思っています。我々も、一つは、ボランティアを活用しなきゃいけないときに、いろいろな、各国の言語に対応しなきゃいけないということで、日本にいる留学生はぜひ、協力いただこうといったような議論をしておりましたけれども、さらに子どもたちを各国を大使館を通じて、いろいろコミットしていただくというのは、非常にいいやり方だと思っていますし。

子どもたちというのは、また一つの大きなキーワードだと思っていまして、これもちょっと今日、御紹介できませんでしたが、いただいたアイデアとしては、特に開発途上国の

アフリカとかアジアの子どもたちをぜひ、東京大会に御招待して、大会を見ていただいたり、東京を見ていただいたり、ボランティアのお手伝いをしてもらったりして、そういう経験を積んでいただくと。そうするとその子どもたちは母国に帰った後、きっと50年、60年、2020大会すごかったよとか、東京大会ってこんなによかったんだよということをその国でどんどん言っていたらと。そうするとそれは、ODAとかでいろんなものを、建物とかインフラをつくる以外にそういう人の親日派をつくるというのは、もしできれば、2020の非常にいいきっかけになると思いますし、縁あって日本で生活する子どもたちに、おっしゃったように、東京大会に関与するような機会をぜひ提供できれば、いろんな意味で日本の将来にとってもいいことになるかと思しますので、ぜひ、やっていきたいと思っています。

あと、やっぱり、視覚的に目に触れるというのは非常に大事だというのは全くそのとおりでありまして、まさに法被とかうちわなども、その参画マークとかですと色々なルールがありますけれども、うちわとか法被というのはある意味、個人が着ればどこでも、神出鬼没でいいわけなので。そういった意味も含めて、先ほど、うちわが14万本既に御購入いただいていると言いましたけれども、オリンピックマークもエンブレムマークもこういう機会を活用して、できるだけ多くの方に何度も何度も見ていただければ盛り上がるんじゃないかというふうに思っています。

ありがとうございました。

○日枝委員長 ほかにございませんでしょうか。

今野さん、どうですか。何かございますか。

○今野委員 ちょっといろんなプロジェクトにも出ましたが、先ほど前川さんがおっしゃったように視覚的に訴えるというか見ていただくということで。先ほどからもう話が出て、もう3年しかないというところで。東京でこうやっていろんなことを考えているんですけど、テーマにも掲げているように、オールジャパンというところで、地方の各所にもろもろそういったものを訴えるといったときに、ずっと考えていたんですけど、地方に必ず、どこにでもあって、みんなの目に触れるって。例えば、先ほどから子どもたちの話があるので、学校とかそういったところに横断幕ではないですがそういったものをやるとか。あと、よくスポーツ選手がどこかの学校で、地方大会何とか優勝みたいな垂れ幕とか、そういったものをというのを早目にいろいろ設置をして、学校ですとか役所ですとか、あとはいろいろスポンサーの問題があるとは思いますが、みんなの目に触れるところに、早目

に日本全国、そういったものを設置したらどうかなというふうには思いますが。すごいシンプルなところで。

○日枝委員長 ありますか、何か。

○中村CF0 垂れ幕、確かにそうだと思います。エンブレができたときにそういうのをちょっどつくってやったんですけども、もう一卷き頑張ろうと思います。ありがとうございます。

○日枝委員長 さっきから議論は出ていたと思うんですけど、もう一回、御質問を投げかけたいたんですけども。被災地を、情報を発信するということと、外国の人や何かが行くというのと、二つあると思うんです、両面がね。何かそこでもう少しアイデアございませうでしょうかね。何か被災地がだんだん、オリンピックまでに忘れ去らないようにすることが非常に大事なんで。何か新しいアイデア、切り口があれば御紹介していただければ、メディアの皆さんなので、あるのかなと思ってお聞きします。何かございませうか。突拍子もない御意見でも結構でございます。多分、事務局でも一番悩ましていると思うんですね、どういふことをやっていこうかということ。

はい。

○佐野委員 以前もちょっと申し上げたんですけども、プレスツアーをどのように組むかということ。当然、来年ぐらいからそろそろ考えなきゃいけないところだろうと思うんですけども。当然、東京、あるいは競技会場というところがあるんですけども、それ以外にプラスアルファの要素としての被災地、これはやはり重要だろうと思います。ツアーの中に被災地を組み込んで、今の状況をきちっと説明するような形を被災地と連動してできないだろうかということは一つあると思います。

それから、これはワーキンググループのときにも申し上げたんですけども、例えば仙台であるとか、盛岡であるとかといったところでIF、もちろん、IOC含めた会議ですけども、そういう会議を開催できないだろうか。そして、そこには当然、役員、プレスが来ます。そのときに地元との交流、あるいは被災地の状況をきちっと知っていただくというふうなことなどは、これはまあ組織委員会、あるいはJOC、あるいは各NFを通してできる話ではないかなというふうな気がしています。

あと3年なので、幾つ会議を開けるかわかりませんが、国際会議をそういったところで開いていくということは、目がそこに向く。そして、世界に発信できるということになるという気がしております。

○藤澤局長 今週、ワールドブロードキャスターズ会議やっていますし、それから来年、今のところ秋ごろには最初のワールドプレス・ブリーフィングということを考えています。大会まで2回ありますので、どういう形で運営していくかというのは、今の御意見も参考にして、きちんと詰めていきたいと思います。

現実に行くかどうか、もしくは、きちんとした情報を提供するかとか、いろいろやり方あると思いますので、今の御助言、大切にしていきたいというふうに思います。ありがとうございました。

あとちょっと付記いたしますと、組織委員会のほうで被災地での盛り上がりということでフラッグツアーとか、それからいろいろなところで、アスリートに行っていて体験イベントをやっておりまして。最初、被災地のオリンピック・パラリンピックへの関心というのは、ほかと比べて低かったんですけども、今ほぼ同じ、もしくはちょっと高いぐらいになっております。被災地の方も興味を持っていただいているという状況に今なっていて、これからどんどん、被災地に関わらず、この気運というのを広めていきたいというふうに思っております。

○佐野委員 当然、これも何度も申していますけれども、ワールドカップ、ラグビーのワールドカップ等とかの、これからある国際大会。熊本のハンドボールもあります。そして、東京オリンピックの後になるけれども、関西国際マスターズがありますけれども、そういったものとの連動。特にラグビーのワールドカップとの連動というのは、実はワールドカップの、ラグビーのほうの側も大変これ大きな、ある意味ではよりどころになるんじゃないかなという気がしています。

○中村CF0 ラグビーのワールドカップとの連携というのは、非常に我々も、いろんなまだやりようがあると思っております。ちょうど昨日のIOCの理事会でも武藤総長から報告したんですけども、ジョン・コーツ委員長のアドバイスもあって、2019年のラグビーワールドカップの事務局と組織委員会とで連携協定を結んだんです。連携協定ってサインはサインなんですけれども、そういう、IOCからすると、組織委員会が他の大会の、地元の組織委員会と連携をするということは過去に例がなかったことで、だからこそコーツ委員長もアドバイスいただいたと思うんですけども。

そういうことで、2019が盛り上がるのが我々も盛り上がることであり、我々がまた2019年のワールドカップのときに何ができるかどうか、いろいろ、定期的な意見交換も今、組織委員会同士やっておりますので、やっていきたいと思っております。ありがとうございました。

います。

○日枝委員長 それじゃあ、森会長から。

○森会長 佐野さんからラグビーの話をしていただいて、元ラグビー協会会長として感謝をしております。

簡単に連携と、僕も随分言ってきましたけれど、意外に難しいんです。チケット販売なんかのシステムをやろうと思って、両方のチャンピオンを選んでやってみたんですが、なかなかうまく進まないんですね。やっぱり、いろんな目的や仕組みが違うんです。

今度は逆に僕は皆さんに、どうやったらこのラグビーと連携ができるかなと。ただ、オリンピックと違ってラグビーのほうのクラスは12の地方でやるということですね。その地方で、熊本、大分とか、神戸だとか、さっきから出ている釜石だとか、東京、熊谷、神奈川、この地域が非常に盛り上がっていますね。ですから、この地域がそれだけ点在しているということは、逆にオリンピックが利用できるということにもなるんです。

今すぐ一番利用できるのは何だろうというと、ラグビーで用意したものをオリンピックのときに使えばいいじゃないかと、これは無駄を省けますね。例えば何だ。ボランティアですね。ボランティアはたくさんいるわけですから、そのボランティアの皆さんをそっくり、逆に言えば、オリンピックのボランティアをラグビーの大会で、練習というか試しと
いうか、そういうことにも使えるわけですが。

そんなようなこともいろいろ考えられるんですが、幸いこの全国で12の街でこのラグビーをやっているという。しかもその一つ一つの地域で、1カ月ぐらいいるんですよ。ですから、大体、一会場で三つか四つの試合をしますと、一つ一つの間を1週間ほどあけないと体力もたないんですね。だから、その間中その地域でお祭りをやっているわけです。応援団もいっぱい来ますね。だから、こういうのはちょっとオリンピックと違うところで、そのときに逆にオリンピックはうまく使っていくということが出来るんじゃないかと思うんで、ぜひ、今日はもう結構ですので。ワールドカップとラグビー。さっき佐野さん言われましたが、ラグビーの翌年には関西、これも7県だったと思いますね。関西7県に四国が一部入っていましたが、このワールドマスターというのは。これは選手の数はオリンピックより多いんですね。お客様よりも。みんな楽しみに来ているんですね、世界中から。

だから、そういうのが続いてありますので、そういう大会との連携をどのようにできるんだらうか。それで一遍、皆さんにまた、むしろそういうアイデア。こういうやり方をしたらどうだ、こう結びつけたらどうだということをむしろ教えていただければというふう

に思います。

それから、被災地を激励するためのオリンピックなんですけど、それどころじゃないよという地域もあるんですね。これは非常に難しいので。実は、今朝も総長と相談していたんですが、ちょっとここでセレモニーをやろうと、こう思ったんですけど、九州であれだけ皆さんが辛い思いをしているのに、お祭り気分はどうかなというふうに、つい。それはどこに叱られるかといったら、皆さんに叱られるんですよ。メディアから大概言われるんですね。書かれる、社説なんかで。それどころじゃないだろう、被災地の人をもうちょっと思ってやったらどうかなんて書かれたら、もう、やろうと思っていたことがみんなしぼんじょうんです。

僕は、岩手の今のラグビー。これを実は、僕は、ラグビーとの強い縁があるので見舞いに行ったんですよ。市長や皆さんが来て、今、ラグビーの予定地をしているあそのところが、絶対に津波が来ないという予定をしていたところに、みんな避難したんですね、市長から、こちらに行けと行って。そこへ予想もしていない津波がばあっと来て、そこに約800名、そのまま全部、亡くなられて。そこに20メートルか30メートルの崖があるんですね。その崖を必至になって登ったのは、子どもたちなんだ。登った子どもたちだけが助かったという。もう本当に市長は涙ながらに話をしています。

じゃあ市長、どうしたらいいかなと言ったら、この霊をなぐさめるにはここでワールドカップをやってくれないかなと。だからぜひ、ラグビーをつくってほしいということで、わかったと、何とかしようと言って私も、政治家をやっていたので、そのときは。軽請け合いをして考えていたから、ものすごい怒られたんです、後から。それどころじゃないじゃないかと、復興なのに、ラグビー場を持つてくるとは何事だみたいなことまで言われましたが、ようやく国体も終わって、今はラグビー場の土盛りなんかが見えてきたり、周辺が整備されたら、みんな大変に今、喜んで、頑張っているんですね。あんな小さい町でできるかとかですね。ワールドラグビーの規格が非常に難しく、最低3万~4万なければさせないということになっておりましたけれども、幸い、1万5,000のスタンドですけれども、これ、特別の事情をもって許可をいただいてつくられた。今、本当にあの連中たちは、釜石の連中は喜んでおりますし、みんなでのこのラグビー場をどうつくるか、盛り上げようという運動にまでなっているということ。

一つの見方、角度によって、被災地が苦しんでいるときに、そんなときじゃないだろうという意見と、逆にそれで元気づけようと、あるいは、そこで亡くなられた霊をなぐさめ

ようとかいうようなことで、逆に気持ちを高めるといふことにもなりますが。オリンピックはそこを十分配慮しながらやっていかなきゃならんなど、こう思っております。またいい何かアイデアがございましたら、ぜひ教えていただければというふうをお願いをしたいと思います。

今日の会議の件ですけれども、本当におもしろいなというふうに思いました。だから、これは、まあ、地方で会議をやろうやという、そこにいる中村君が一番反対するんです、彼は。なぜかといったら、彼は財務局長なんです。いろんなアイデアを持ってきて、何かやろうと、それはだめ、これはだめという。もう昔の大蔵省ですから、彼は財務省ですから。だから、もうみんな切っちゃうので、みんながやろうと思っていたことがしぼんでしまうという面もないわけではないんです。

でも、地方会議を、僕は、一つ成功したのは、江ノ島にヨットを持っていくということ。当時、コーツさんたちを案内をしまして江ノ島に行ったら、やっぱりものすごい盛り上がりまして、みんなが大変びっくりして。何でびっくりするかというと、メディアが来るからですね。メディアがうわーと来るといふので、初めて、あ、オリンピックをやるといふことになるのかということ、何となくその地域の人たちがにぎわいを想像するんだらうというふうに思います。

ですから、これも幸い、このオリンピックは御承知のように、千葉、埼玉、神奈川、静岡等で、今、一部山梨も入るかもしれませんが。そういうところを逆に、そういうところで会議をするといふのは、大義名分が立つんじゃないかなというふうに思いますし、被災地でやるのも一つの方法かもしれません。

このアイデアも、とてもいいアイデアなので、中村君、あまり金を惜しまずにそこそこは。それから、第一、皆さん、全員にも来てもらったらいいですね。そこで地域と、地域の皆さんとオリンピックをどう取り組むかというテーマを出してもらってやるのかも一つの考え方かなと思います。

今、御意見いろいろありました中で、ちょっと気がついたことです。長くなりました。
○日枝委員長 ありがとうございます。

中村さん、何かありますか。

○中村CF0 盛り上げのために必要な予算は確保いたしましたので、ぜひ、いいアイデアをいただければ。よろしく願いいたします。

地方での会議といふのは、今いただきました、会長からもありましたけれども、ちょっ

と考えてみたいと思っております。どういう会がいいのか、我々が行くのがいいのか、あるいは、そのIOCの方々がいらっしゃったときがいいのかとか、いろんなチャンスがあると思っておりますので、ぜひ検討したいと思っております。

ありがとうございました。

○日枝委員長 ほかに何かございますでしょうか。時間もだんだん迫ってまいりましたが、3年前、今言っておいたほうがいいことあるんじゃないでしょうかね。

それじゃあ。

○齋藤委員 フジテレビの齋藤でございますが。

被災地の気運ということで、一つ。2002年のサッカーのワールドカップをやったときのキャンプ地、中津江村のカメルーンですとか、非常に盛り上がった思い出があります。被災地でキャンプができるような場所が実際に、除染の状況などもありますのでわからないんですけども、Jビレッジのようなところがキャンプにふさわしい場所であれば、いろんな、まあ種目にもよるんでしょうけれども、キャンプ地として招聘を組織委員会としても応援するとか。

やはり、実際に選手とかチームとか、職員といいますか団体の皆さんに触れ合うことによってそのチームを逆に応援しようという気になっていくと、なっていったというのが2002年のときの我々の成功体験としてあるので、そういうキャンプ地の候補になりそうなところを積極的に各団体。例えば、もう既に体操などはキャンプ地で福井県の鯖江市が立候補しているという話もありますし。そういういろんな事前の恐らく、何カ月ぐらい前にやってくるのかわかりませんが、そういう招致について、組織委員会も積極的に協力していくことを考えたらよろしいんじゃないかなというふうに思います。

○日枝委員長 ありがとうございました。

ほかにございませんでしょうか。

今日の時間が迫ってまいりました。委員の皆様にはいろいろ闊達な御意見をいただきまして、ありがとうございます。まだまだ御意見もあろうかと思っておりますけれども、この辺で今日の会議を終わりたいと思っておりますが。

皆様にぜひお願いしたいのは、せっかくメディア委員会、オールジャパンでやっている意味のこのメディアの皆様がお集まりでございますので、今後ともいろいろなアイデアがございましたら事務局のほうにどんどん御提案をいただいて、それが2020のオリンピック・パラリンピックに成功するようにしていただくのが皆様のお力でございますの

で、今後ともどうぞ、よろしく願いいたします。

それでは、最後に事務局から何か御連絡があるようでございます。よろしく願いします。

○小林部長 本日はたくさんの意見をいただき、ありがとうございました。

今日かなり具体的な御意見もいただきましたので、事務局のほうでしっかりとそれを捉えて、実現に向けて取り組んでいきたいというふうに思います。また進捗を報告させていただきます。

それから、皆様の御意見も踏まえてアクション&レガシープラン2017のほうも取りまとめまして、7月24日に開催予定の理事会において審議をした上で、公表をさせていただく予定です。

また、小・中学生からのポスターについては、今年度もメディア委員の皆様を選考委員、審査委員をお願いしたいというふうに考えております。ぜひ、御協力をよろしく願いいたします。審査の時期は、来年、年明けを予定しております。

なお、昨年度の入賞作品は、既にお気づきかもしれませんが、9階入り口のホワイエのところに展示してございますので、お帰りの際に御覧いただければと思います。

最後に、事務連絡2点ですけれども。一つ目は、お配りしております資料と本日の議事録につきましては、後日、組織委員会のホームページで公開をさせていただきたいと思っておりますので、御了承よろしく願いします。

また、次回の委員会の開催につきましては、年明けを予定しております。近づきましたらまた御案内させていただきますので、よろしく願いします。

○中村CF0 最後に1点、今、事務局では中井CR0のもとで開閉開式に向けた、まずは基本コンセプト、有識者懇談会のもとで議論をしておりますけれども、その基本コンセプトに向けた御意見ということで、森会長名で各委員にお考えを聴取をいたしましたけれども、非常に多くの方から御意見を賜りました。平和、友情、あるいは日本のよさをきちんとPRすべきであるとか、あるいは、中には具体的な演出などもいただいたものもございました。本当にありがとうございました。

来週にまた有識者懇談会を開かせていただきまして、そこで皆様からいただいた御意見、きちんと御紹介をしたいと思っております。

どうもありがとうございました。

○日枝委員長 ありがとうございました。

それでは、第7回メディア委員会をこれで終了させていただきます。皆さん、本当にありがとうございました。